

随想

万葉の春

犬 養 孝

1 さわらび

ある暖かになった春の日に、飛鳥の山野を歩いていて、ふと山水のおちてゆく小流に、崩え出たワラビはないものかと、水辺をとりとめもなく見ていると、イヌフグリの花が一輪、スイスイと流れていった。それは、まさに天与の一輪、春のさきぶれのように思われた。雪や水にとざされた永い冬を脱して、野も山も解きはぐれ、ほっと吐息をついた一輪だったのだろう。ワラビは、もう、野山に、せせらぎの畔に、渦をまいた若芽をもたげているにちがいない。

万葉集をよむ人の、おそらく誰しもが、忘れない歌に、志賀皇子の、

石ばしる 垂水の上の さわらびの

崩え出づる春に なりにけるかも (巻八一—四一八)
の歌があることだろう。自然の春を待ち得た人にも、やっと心の春を待ち得た人にも、流れ出る歌声に乗って、のびやかに心のはずむものがあるのにちがいない。

「石ばしる」を「垂水」の枕詞といつてしまえば、それまでだが、いままで堅くとざされていた水辺が、とけて流れて、岩石の上をすきとおる水の激し流れるイメージを、離れ去ることはできない。それだけのイメージを背負って、垂水(滝)がおかれ、その垂水のほとりに、水しぶきにゆれ動くかのように、さわらびが崩え出ているのだ。やっと待ち得た駈瀉の春への吐息を、深々とつかないではいられないところだ。

歌意も明るく伸びやかなのはいうまでもないが、歌ごろの焦点ともなるさわらびが点出されるのに、大景から中景、さらに焦点と

なる小景にしばらくは、生かされてゆく表現の呼吸を見のがすことはできない。その上で、主観が、四・五句に、ゆったりとうち出されるのだ。「ワラビ崩ゆ」と、意味だけをたどればまったくつまらなくなるが、句ごとにこめられる作者の大きな感動の波は、表現の構成のたしかさに、裏うちされている。

こんにち、一般には和歌を黙読することに馴れているようだが、歌は、声をあげてうたわれるべきもの、この歌も、声に出してうたって見れば、なんとゆたかな律動感にあふれていることであろうか。「垂水の上のさわらびの……」と、「の」の音をかさねてゆく呼吸は、ぎくしゃくしないで、とけて流れてよどみない流動感にあふれている。その上、「崩え出づる・春に・なりに・けるかも」は、意味の内容からいえば単純のことを、律動感あふれて四節にひきのばし、あたかも騎蕩の陶醉を思わせるようである。作者志貴皇子は、千二百六十余年前に世を去ってしまったているが、かれが残した心の音楽は、よどみない心のうねりに乗って、千古にひびきかえって止まないようである。

作者の志貴皇子は、天智天皇の皇子で、天皇と宮人の「越道君伊羅都亮」とのあいだに生まれた子である。「コシノミチノキミ」とよめば、北陸出身になるうし、「オチノキミ」とよめば、伊予出身であるかもしれない。天智天皇には、建皇子・大友皇子・川島皇子

・志貴皇子と、すべて腹ちがいの四人の男の子があったが、建皇子は、生来口がきけず、斉明女帝の四年（六五八）に八才で世を去り、大友皇子は壬申の乱（六七二）に近江長等山籠りに自頸したから、壬申の乱後の天武天皇一統の時代には、天智の男子は川島と志貴との二人だけが生きのこることとなった。天武天皇には、異母兄弟ながら男子が十人もある。のちの奈良朝時代の稱徳天皇まで、天武系の天皇のつづく実情を思えば、川島・志貴の生きにくさは、火を見るよりも明らかで、天武八年（六七九）五月、吉野宮での六皇子の誓盟のなかに、この二皇子が加わっているのを見てもわかる。天智の子など、できれば前代に死んでいてくれたらよかったもの、生きて以上、軽んずるわけにもゆかず、重んずるわけにもゆかず、結局は、政治のアウトサイドにおかれる以外にはなかっただろう。それだけにまた、志貴皇子らの深く気をつかわねば生きられない立場も思われるのである。

志貴皇子の歌の、

むささびは 木末求むと あしひきの

山の狸夫に あひにけるかも

（巻三―二六七）

など、たんに事実をうたったり、ムササビへの同情をうたっただけのものではなくて、すでにもう天性になっていただろうこの人の、現実面での控え目な心情的姿勢をもあらわすものであろう。出る杭

は打たれることは、よそ事ではなかったのだ。

それだけに、政治・社交などの現実面からはなれた、抵抗のない自然の風趣の世界にはいつては、慶雲三年（七〇六）初冬の、文武天皇難波宮行幸のおりには、

葦辺行く 鴨の羽がひに 霜降りて

寒き夕は 大和し思ほゆ (巻一一六四)

とうたつて、普通の人の気づかない、透徹した写真のなかからの感懐をもつたえるのだ。

日々の苦惱が、かえて、対象への深い心づかいをしめして、逆に、清明温雅な新風をも生ませるようになるのだろう。

飛鳥浄御原宮から、大和三山のあいだの藤原宮に遷都（六九四）があつてのちの、古都回想のうた、

采女とらぬめの 袖吹きかへす 明日香風あすかかぜ

都を遠み いたづらに吹く (巻一一五一)

も、采女の袖吹きかえすみやびの回想が、忽焉と消える幻滅を描くなかに、遠い寂寥を見とおしているようで、しかも采女のイメージの底に、若い日の母の姿への慕情も、たたまれているかも知れないのである。こんにち吹く飛鳥の地を吹く風にも、皇子の歌声は颯々ときこえてくるのだ。

壬申の乱以後、天武天皇一統のエネルギーは、奈良朝最後の一つ

前、称徳天皇までつづいた。つぎの光仁天皇こそ、志貴皇子の御子の白壁王である。してみれば、志貴皇子は、天智系の、奈良末から平安にかけての再生発展にとつて、なくてはならない人だし、万葉に優艶雅醇の細みの世界をのこした湯原王が、志貴皇子の子であつてみれば、志貴皇子の歌は、万葉にわずか六首の歌をとどめるのみではあつても、清明典雅の新鮮な歌風を後代に伝える上で、なくてはならない存在であつた。

さ、わ、ら、びの歌には、題詞に「志貴皇子權御歌」とのみあつて、どういう時の喜びともわからないが、位階の昇進か、加封などのあつた時のものかも知れない。ともかくも、あくまでもすなおな人柄と、目に見えないものまで見えてくるゆきとどいた心のつかい方とは、さ、わ、ら、びの萌え出づる春をたたえる律動のなかに、ひそめられ、しかも、さりげない天真の奏楽となつているのだ。

志貴皇子が靈龜元年（七一五）〔統日本紀〕は靈龜二年とする。平城の春日宮で亡くなつたとき、笠金村かさかねむらが新風、劇的な挽歌をのこしたことは、よく知られている。御子の光仁天皇は、宝龜元年（七七〇）、父君に春日宮天皇の号を追尊した。

こんにち、春日山・高円山の西方、奈良の一角は、天武一統の華麗な遺跡をとどめ、日曜日など、群衆で埋まるほどだが、同じ時に、春日・高円山の東方、田原村（現、奈良市）は、ひっそりとしず

まりかえり、春日宮天皇陵は矢田原字西山の、光仁天皇陵はその東四半口、日笠字王の塚の、共に茶畑の青い波のなかに永遠の眠りをつづけている。入り日に赤く映える茶畑のなかで、志賀皇子父子は、とわのやすらぎを、静寂のただなかで、楽しんでるのである。

矢田原小字カミの春日宮神社は志賀皇子をまつる。村の中央親王山の傍の手水川のさわらびは、年ごとに崩えに崩えて、垂水の音は、せんかんと広い空に響けてやまないのだ。

2 梅の花

きびしい冬のさなか、人影さえも見られない藪条とした野山に点々と白梅は咲きはじめる。それでいて、どこか冬を脱した春のことがぶれを思わせるのだ。梅はそんな冷たい空気の中で、凛とした気韻を空にひろげている。

わたくしは、大和の山の辺の道の巻向川の上流の、三輪山と穴師山がつくる谷あいの白梅が忘れられない。そこは二つの山にはさまれた狭い空の下に、巻向川のすきとおる水が、せんかんと流れていて、小板橋が渡してあり、その橋の傍に、白梅が二本、川を覆うておっているのだ。谷あいの小道をゆくと、近づくほどに馥郁の香

は、狭い山ぶとところに、満ちあふれてくるようだ。もちろん、人かげはまったくくない。

万葉びとも、冬と春のあいだに、梅の花を感じていたらしく、歌を四季に配列した巻十では、冬の部立にも春の部立にも梅の花を入れている。

雪見れば いまだ冬なり しかすがに

春霞たち 梅は散りつつ

(巻十一一八六二)

とうたうのが、梅のほんとうの姿だろうし、これを「春」の意識でとらえれば、

春されば まづ咲く宿の 梅の花

独り見つつや 春日暮さむ

(山上憶良、巻五一一八)

春さればまづ咲く、花として感動されるのであろう。季節感が固定しないのも、かえって実相をつたえているようである。

万葉集では秋の約一四〇首につづいて、梅は約一二〇首、第二位を占め、桜の約四〇首をはるかにおいぬいている。「花」といえば、桜に定まる後代とはちがって、梅がこんなに多いのも、梅に対する感覚が、大分ちがうところがあるのであろう。一言でいえば、一種のエキゾチシズムによってあこがれられていたからであらう。

こんにち、いっばんには、野山に咲く白梅を、在来からのものと

してあやしまないようだが、梅はもともと中国渡来のもので、原産地については、はっきりしていないようだが、中国の四川省湖北省の山岳地帯かといわれている。中国の梅が、七世紀ごろかに九州に渡来して、しだいに都の方にも植栽されるようになったらしい。中国では古く「詩経」にもよまれているが、日本では、「古事記」にも「日本書紀」にもなく、「懐風藻」に、はじめて、葛野王の五言詩「春日詠^よ梅^{うめ}」が見られる。葛野王は天智天皇の子大友皇子（弘文天皇）と十市皇女とのあいだの子で、藤原宮の慶雲二年（七〇五）に亡くなっているから、藤原宮のころには、植栽されていたものであろう。万葉集では、平城京期より以前の作として確認されるものはなく、ほとんどすべてが、平城京期のものである。歌によれば、宿^{しゆく}や家^けや園^{ゆゑ}に植えられて、賞美^{しょうび}されていたようである。ことに九州、遠^{とほ}の朝廷^{てうてい}、大宰府を中心としては、多かつたらしく、天平二年（七三〇）正月十三日には、当時の大宰帥大伴旅人の官邸で「梅花宴」が催され、宴の歌三三首がのこされているほどである。当時は、貴族官人ら知識人のあいだでは、中国唐風絶対崇拜の時代だから、風雅・風流の対象として、唐風異国的な雰囲気^{ふんぎ}に陶醉し、たのしみ遊ぶところがあつたのだらう。

平安朝期の「枕草子」には「木の花は梅の、濃くも、薄くも紅梅」とあって、後代には、紅梅が喜ばれているが、万葉の梅花は、

雪をもあざむく白梅である。また、梅の香は、溪谷や山おとこに満ちあふれるほどだし、なによりもたたえられるところだが、万葉では、左の、

梅の花 香をかぐはしみ 遠けども

心もしのに 君をしそ思ふ

（市原王、卷二〇—四五〇〇）

の一首だけで、大宰府の「梅花宴」の歌のなかにも、香をよんだものは、一首もない。まず、白花の眺められた美しさがたたえられ、春の夜の梅花について、色こそ見えね香やはかくる」という感覺は、後代をまたねばならなかったのだらう。

白梅が、平城京期の貴族官人らのあいだに、このような異国味を加えた風雅のたねとして、眺められ、愛賞されていたから、庶民の花ではとうていあり得なかつた。

貴族官人らにとっては、この梅の「咲く」につけ、「散る」につけ、「咲き散る」につけ、抒情のたねとなつていたので、

ももしきの 大宮人は いとまあれや

梅をかざして ここにつどへる

（卷十一—一八八三）

の歌もあるわけで、後の「新古今集」に、

ももしきの 大宮人は いとまあれや

桜かざして 今日も暮しつ

とあるのを見れば、時代の趣向のちがうところを、如実に語るようである。

白梅の咲くころは、冬から春への最中で、雪の降ることも多いころだから、

吾背子に 見せむと思ひし 梅の花

それとも見えず 雪の降れば

(山部赤人、巻八一―四二六)

のように、雪との関連でよまれた歌は、約三〇首にもおよんでいるし、白梅の白さを雪の白さにたとえることも、「雪かも降ると見るまでに」、「雪の色を奪ひて咲ける」、「残れる雪をまがへつるかも」など、数多く見られる。

梅と、鶯や柳の景物とがかもす早春の風情は、それぞれ一〇教首を数えて、

梅が枝に 鳴きて移ろふ 鶯の

涙白砂に 沫雪そ降る

(巻十一―一八四〇)

宵柳 梅との花を 折りかさし

飲みての後は 散りぬともよし (笠沙弥、巻五一―八二一)

の歌などを見ると、前の歌には、正倉院御物に見る繊細巧緻な美術工芸のデザインが思われてくるし、後の歌には、風情への陶酔も思われるのである。

梅の花と、霞や春雨などのとりあわされた風趣も多く、さらに、月光ととりあわされては、

誰が死の 梅の花そも ひさかたの

清き月夜に ここだ散り来る

(巻十一―三二五)

とうたって、月光に散り散く白花の美しさまでくりひろげられる。

飛鳥・藤原京期では、とうてい考えられない、細みの世界、みやびの世界である。梅花をめぐっての宴飲に酒はなくてはならぬものだから、かの大宰府での梅花宴に追和した大伴旅人の歌に、

梅の花 夢に語らく 風流たる

花と吾思ふ 酒に浮かべこそ

(巻五―八五二)

とあって、酒盃にうかぶ梅の白花の風情を、このように手のこんだ空想によってうち出し、みやびに徹する抒情をも見せるのだ。

酒坏に 梅の花浮べ 思ふどち

飲みての後は 散りぬともよし

(大伴坂上郎女、巻八一―一六五六)

にいたっては、風雅の刹那への耽溺を語って、悔いるところない趣きである。

エキゾチシズムにいろどられたみやびの世界への飽くない陶酔こそ、万葉梅花の歌の実相といえよう。

わたくしは、こゝでふと、こんにちの熊野路、中辺路の峠越えの

山村に、点々と咲く白梅を思うのだ。それは梅林ではなくて、思われぬ山道のわきや、農家の軒に見える、さりげない鄙びた花だ。また、木曾谷の川べりの畑のわきにぼつんと咲く、丈の低い白梅を思う。これもまた、さりげない山國の春のいぶきである。梅花はついに、この國の野山、谷々、村里に、伝来も風雅も忘れ、定着さえも忘れて、いきづいていくかのようである。

わたくしはまた、太宰府天満宮の梅林ではなくて、都府楼跡後方の山村に思われぬ白梅を見つけ、天平筑紫の梅を問うてみたい気持ちに駆られている。

3 さくら

梅の花 咲きて散りなば 桜花

継ぎて咲くべく、なりにてあらずや

(巻五―八二九)

梅の花が散ったかと思うと、やがて、春雨に争ひかねて、桜の花がつついて咲くようになる。上層の万葉びとたちは、当時、エクソチックにも思われた梅の花を、ことのほか愛して、桜の歌の三倍にも近い一二〇にもおよぶ梅の歌を、万葉集中にとどめているが、桜もまた一般に、たいへん待たれ、愛され、たたえられていた。

木の暗茂に、咲く姿、散り落ちる惜しさ美しさ、はなやかに明る

い花の盛り、と、桜の花の佳さが、飽くなくうたわれているといつてよい。それも、後代のように、「花」といえば「桜」になったり、また、ぱっと咲いてぱっと散るところに「日本の心」が感じられたりするような型にはまったものではなく、さっぱりと自然のままの美しさに、心を傾けているようである。それも、「屋戸」にある桜、「わが屋前の桜」、「垣内の桜」のように、家の庭の桜もなくはないが、約四〇首の大半は、山や野辺や、丘辺、流の上、山峽、峯の上、峠など、自然の山野に自生する桜の花である。梅が終れば、大和はもちろん、國のはてまで、いっぺんに咲きにおう桜の花の春とはなるのだ。ただ、万葉当時の桜は、こんにち普通に知られている桜、ソメイヨシノなどの類ではなくて、いわゆるヤマザクラである。

こんにち、桜といえば、まず吉野山が思われるが、吉野の桜は万葉には一首もない。平城京東郊、春日野・高円山・三笠山の山野や、香久山などのほかは、大和から河内への竜田の山越えの桜が、とくにはなやかである。

万葉の当時、ことに平城京の時代には、大和から難波への公道は、平城京を出て、大和川北岸の竜田の山の、川ぞいの丘辺の道を越え、河内国府を経て難波へとむかうものであった。大和川の沢谷は、西からの台風などが大和へはいる通路でもあるから、この竜田

に、竜田彦・竜田姫の風の神がまつられた。竜田の神奈備であつて、いまの位置とは異なるが、竜田本宮がこれにあたる。こんにち、本宮を経て、生駒郡三郷町高山から峠の村までの登り道は、枇杷畑で、それから河内へくだるまでの間は、ほとんどすべてがブドウ畑となつていて、桜は一本もない。ただ亀ヶ瀬岩上方の、俗称留所の山の山頂に、植樹された数本の桜を見るばかりである。

ところが、この付近は、昭和六年の地すべり以来、地すべりが絶えないので、留所の山の山頂からの表土をはぎとり、大工事が行なわれていて、山頂の桜の消滅も寸前の状態となり、地形もすっかりかわつてしまふようである。それでもまだいまのうちは、山頂満開の桜は、大和や河内から吹きあげる風に散らされて、空間を流れとび、山峡へと消え去つていって、万葉のむかしを瞬時ながらも、再現させるにちがいない。

その万葉のうたは、ほとんど全部に近く、天平の歌人高橋虫麻呂のつくるところであつて、天平四年(七三二)、藤原字合が西海道節度使となつて出発のとき、虫麻呂は、この竜田まで見おくつてきて、送別の歌をうたつた。それは「白雲の 竜田の山の 露霜に色づく時に うち越えて 旅ゆく君は」ではじまつて、九州での活躍を想像し、終りを、

……冬こもり 春さり行かば 飛ぶ鳥のはやく来まされ 竜

田道の 丘辺の路に 舟つつじの にははむ時の 桜花 咲き
なむ時に 山たづの 迎へ参出む 君が来まされ

(卷六一九七二)

というものであつた。まるで、演劇、竜田山別れの段とでもいたいほどの、つくられた美しい世界であつた。こんにち、ブドウ畑になつている、竜田道の丘辺の路は、当時は、あちこちにヤマザクラの開花が見られたのであろう。

この竜田越えの道など、こんにち歩く人は、まず一人もいないから、芽立ちはじめたブドウ畑の、河ぞひの丘辺の道、をうねうねとひとり歩いてみると、山間の木立ちのあいだには、ヤマツツジが咲いているし、かえつて、峠の桜を思い描くには最適である。まして、留所の山から桜の花びらが流れてくるならば、

白雲の 竜田の山の 流の上の 小鞍の嶺に 咲きををる 桜
の花は 山高み 風し止まねば 春雨の纏ぎてし降れば 秀つ
枝は 散りすぎにけり 下枝に 残れる花は しましくは 散
りな乱れそ 草まくら 旅行く君が 帰る来るまで

(卷九一七四七)

とうたつた絢爛たる虫麻呂の世界は、彷彿とおとりに出てきて、花の香さえもかおってくるようである。「小鞍の嶺」というのは、亀ヶ瀬の流ち流れているところの上方の留所の山をさすものであろう。

まるでカメラの移動撮影のように、「白雲の、竜田の、山の、流の、上の、小
鞍の、嶺に」と、「の」の音におくられるようにして、その山頂に、
咲きたわむ桜の花を位置づけ、山風と春雨のなかの、秀つ枝、下枝
の姿を描く。それは竜田山の桜花の美しさへの陶醉の姿でもある。
だから、この歌の反歌には、

わが行は 七日は過ぎじ 竜田彦たつたひこ

ゆめこの花を 風にな散らし

(巻九一―七四八)

とうたって、農耕のための風の神であるはずの竜田彦に、風雅への
耽美のいのりをもうったえるのである。

竜田の山越えの道からは、大和国原も河内平野もひろびろとした
空の下にくりひろがっている。山峡に大和川の水流が、逆光線にキ
ラキラ光っているのも見える。あのあたりに虫麻呂のうたった朱塗
の、河内の大橋もあつたのだろうか、時の流れを忘れてしまっ
ほどである。虫麻呂のころよりはずっと後の、天平勝宝七年(七五
五)二月十七日、大伴家持も、「ひとり竜田山の桜花を借しむ歌一
首」として、

竜田山 見つつ越え来し 桜花

散りか過ぎなむ わが帰るとに(巻二十一―四三九五)

とうたっている。峠の桜は、往還の人々の旅ごころに、咲くにつけ
散るにつけ、深くきまこめられるのだ。

大和から紀和国境のまっつち山を越え、紀ノ川を經て熊野路にむか
うと、藤白坂・蕪坂の峠を越え、有田川畔、糸我(現、有田市)か
らは糸我峠(万葉では絲鹿の山)を越えて湯浅にむかう。こんに
ち、この旧熊野街道は、夏ミカンの畑のなかに、わずかにそのあと
をとどめている。たわにみのつた夏ミカンの下をくぐるようなと
ころに、近世の「左くまの道、右檜原へ」の石標が傾いている。も
ちろん、ここもまた人っ子一人通らない。近年、土地の方々の肝煎
りで、開発防止と故地保存のために、万葉歌碑が、中將姫伝説の雲
雀山得生寺の境内、一里塚の傍に建てられた。需めに応じてわたく
しが筆をとった。

足代過ぎて 絲鹿の山の 桜花

散らずあらなむ 帰り来るまで

(巻七一―二二二)

という作者未詳の歌である。これも熊野路をゆく旅の人の歌であっ
て、旅の道行の途上、大和よりはいちはやく咲く熊野路の峠の桜へ
の感動と愛惜の思いをうち出したものだ。

ヤマザクラは葉と花とが同時にひらく。ソメイヨシノよりはひと
足はやく、三月の下旬ごろには、こんにちも、糸我峠の付近は、あ
そこにもここにもと、ヤマザクラの開花が見られる。普通の桜のよ
うに爛漫とはいえないところに、清浄野趣に充ちた美しさがある。
喘ぎ喘ぎ峠にかかるころ、どこからともなく花びらが流れてくる

し、頂きに立てば、山風に吹きとぶ花びらは、有田川河谷の空へと舞いあがってゆくのだ。最近、松の植林のため、このヤマザクラが伐られてゆくのは、紀の国のためにも、日本のためにも惜しまれてならない。この峠を往還した千三百年前の旅びとの、美しい旅ごころの吐息は、いまもいきいきとこの糸我峠のヤマザクラの花びらに、深々とたたまれているのだから。

〔華道〕より)